

「訓点語と訓点資料」第一三三輯（二〇一四・九・三〇）抜刷

玄應撰 『一切経音義』 卷第五における

本文と目録との経名不一致について

佐々木 勇

## 玄應撰『一切経音義』巻第五における

### 本文と目録との経名不一致について

佐々木勇

○、『玄應一切経音義』について

玄應撰『一切経音義』は、玄奘三蔵（六〇二―六六四年）のもとで訳経にあたった玄應が七世紀中頃に作成した諸経の音義である。道宣（五六九―六六七年）の序文中および道宣『大唐内典録』（麟徳元年（六六四））に見られる「大唐衆経音義」が正式名であろう。しかし、唐智昇『開元釋教録』、八世紀・九世紀の敦煌・吐魯番写本や奈良時代の「正倉院文書」にすでに「一切経音義」と記されており、宋版・高麗版・日本古写経の内題等でも「一切経音義」とされているため、現在まで「玄應一切経音義」「玄應音義」と呼称されている。「初唐の一切経五百五拾余部について、各経ごとに所出順に字句を抽出して掲げ、それぞれに音注、義注及び字体注を加えたものである。」<sup>1)</sup>

玄應撰『一切経音義』は、選録後ただちに広まったらしく、敦煌・吐魯番の八世紀・九世紀書写本が、ロシア・イギリス・フランス・ドイツなど各地に所蔵されている。<sup>2)</sup>

日本においても、「正倉院文書」に天平や天平勝宝の書写記録が見られ、聖語蔵に天平書写の巻第六（首尾欠）が所蔵されている。

まとまった古写本として、書陵部蔵大治書写法隆寺旧蔵本、広島大学等蔵承安・安元書写石山寺本、平安時代写七寺蔵本、同興聖寺蔵本など、一切経の一部として書写されたものが現存する。<sup>3)</sup>

また、宋版・高麗版・金版にも収載され、今に伝わっている。<sup>4)</sup>

一、『玄應一切経音義』の二系統 — 山田孝雄の指摘 —

山田孝雄「一切経音義刊行の顛末」（大正十一年五月二十五日）（『一切経音義 二十五卷』（一九三二年、西東書房））は、日本古写本大治本が、宋版系とは異なり、高麗版系であることを早くに指摘した。

今この本を以て現存の他の本に比較するに明蔵本最も異にして高麗蔵本最も近しとす。而してそれらの諸本の系統を見るに宋版、元版、明版は一系統に属して、この大治本と高麗本とは別に一系統たり。

そして、巻第一について諸本対照結果を示し、高麗版本よりも、大治本に『玄應一切経音義』の古い本文が残っていることを述べた。

これを見たるのみにても大治本と慧琳本所載のものと麗蔵の

本とが近き関係を保てるを知るに足るべし。これを以て推すに玄應の面目は宋元系統の本よりも、この系統の本に多く伝えられ、これらのうちに在りても麗藏本よりは高麗本に多く存すといはざるべからず。果して然らばこの本はこれ玄應の真面目を徴するに極めて重要なりといはざるべからず。

右は、『玄應一切経音義』研究初期における重要な指摘である。右論文中で山田は、宋版系と高麗版系との第一の相違点として、宋版（書陵部藏開元寺版）巻第五の目録および本文に存する大きな欠落を挙げている。

今大治本には巻第五を欠くといへども、幸にして第一帖の目録を具す。その目録を以て本書（佐々木注：高麗版）に照すに本文の存する限りに於いてはまさしく一致せり。而してその巻第五の目録にある超日月三昧經以下温室洗浴衆僧經に至るまで四十一經の目は宋元明の諸本になくして本文亦これなし。然るに高麗本にては目録本書の如くにして内容も亦正しく載せたり。

「超日月三昧經」→「温室洗浴衆僧經」までの「四十一經」の目録および本文が、宋元明の諸版に無く、高麗版には存することをもって、大治本と高麗版とが同系であることの最大の根拠としている。

ただし、山田が目にした大治本と聖語藏本に巻第五本文が欠けていたため、日本古写本における巻第五本文が高麗版と同じなのかどうかは不明であった。また、山田が参照した宋版は、書陵部藏の開元寺版のみであった。

よって、他の日本古写本および宋版東禪寺版・思溪版の本文を

確認する必要がある。

以下、『玄應一切経音義』諸本巻第五における本文および目録の経名を調査し、その経名から諸本を分類する。<sup>①</sup>

二、『玄應一切経音義』巻第五における本文の経名

1. 高麗版・金版および日本古写本における本文の経名

A. 高麗版・金版『玄應一切経音義』巻第五における本文の

#### 経名

まず、山田が大治本目録と比較した高麗再雕版の音義本文から、連番を付して、経名を左に抜き出す。<sup>②</sup>

1 海龍王經

2 央掘魔羅經

3 觀察諸法行經

4 七佛神呪經

5 菩薩本行經

6 稱揚諸佛功德經

7 力莊嚴三昧經

8 須真天子經

9 般舟三昧經

10 等目菩薩所問經

11 超日明三昧經

12 月上女經

13 中陰經

14 須彌藏經

15 佛華嚴入如來不思議境界經

- 16 諸佛要集經  
17 文殊師利佛土嚴淨經  
18 濡首菩薩無上清淨分衛經  
19 大乘同性經  
20 阿閼佛國經  
21 蓮華面經  
22 迦葉經  
23 孔雀王神呪經  
24 發覺淨心經  
25 無上依經  
26 移識經  
27 未曾有經  
28 不思議功德經  
29 大吉義呪經  
30 菩薩夢經  
31 文殊問經  
32 密迹金剛力士經  
33 東方最勝燈王如來經  
34 成具光明定意經  
35 太子須大拏經  
36 太子墓魄經  
37 須賴經  
38 金色王經  
39 獨證自誓三昧經  
40 摩訶摩耶經  
41 如來方便善巧呪經  
42 勝鬘經  
43 須摩提經  
44 梵女首意經  
45 月明菩薩經  
46 滅十方冥經  
47 出生菩提心經  
48 普門品經  
49 心明經  
50 不思議光菩薩所說經  
51 文殊師利問菩薩署經  
52 德光太子經  
53 施燈功德經  
54 菩薩訶色欲經  
55 人本欲生經  
56 不必定入印經  
57 魔逆經  
58 濟諸方等學經  
59 菩薩行五十緣身經  
60 彌勒菩薩所問本願經  
61 堅固女經  
62 演道俗經  
63 寶網經  
64 百佛名經  
65 觀無量壽經

66 不空羼索經

67 觀藥王藥上二菩薩經

68 請觀音經

69 十一面觀世音經

70 觀世音菩薩授記經

71 鹿母經

72 鹿子經

73 除恐災橫經

74 溫室洗浴衆僧經

75 四不可得經

76 諸德福田經

77 虛空藏菩薩所問持幾福經

78 菩薩投身餓虎起塔因緣經

79 頻毘娑羅詣佛供養經

80 薩羅國經

81 天王太子辟羅經

82 阿彌陀鼓音聲陀羅尼經

83 八陽神呪經

84 幻士仁賢經

85 後出阿彌陀偈

高麗初雕版・金版も、右と全く等しい。これらの底本であった北宋開寶蔵『玄應一切經音義』の本文經名が、これと同じであったものである。

以下、この高麗版本本文の經名順と經名とを基準として、諸本の本文經名および目錄經名順と經名とを記載し、考察を加えること

とする。

B. 日本古写本『玄應一切經音義』卷第五における本文の經名

右の高麗版に近く、高麗版よりも『玄應一切經音義』原本の姿を留めるとされる、日本古写本の『玄應一切經音義』卷第五本文の經名を見る。

日本古写本のうち、高野山金剛峯寺蔵中尊寺一切經(一一一七―一二六年頃写)中の『玄應一切經音義』卷第五の本文の經名は、左のとおりである。高麗版本文經名と同一のものは經名番号のみ挙げ、高麗版と字句の異同がある場合は、字句の増減がある場合は、の傍線を引く(以下、同じ)。

①「中尊寺本」

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22	23	孔雀	神呪經	24	25	26	27	28
29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	摩訶	41	42
43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57
58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72
73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85		

中尊寺本の經名順は高麗版・金版と全同で、經名も一致する。經名の異同は、略称・異体によるものである。

同じく七寺本(安元三年(一一七七)頃書写)卷第五の本文經名は、次のとおりである。

②「七寺本」

1 . 2 . 3 . 4 . 5 . 6 . 揚諸佛功德經 . 7 . 8 . 9 . 10 . 11 .  
 12 . 13 . 14 . 15 . 16 諸佛惡集經 . 17 . 18 . 19 . 20 . 21 . 22 . 23 .  
 24 . 25 . 26 . 27 . 28 . 29 . 30 . 31 . 32 蜜迹金剛力士經 . 33 . 34 .  
 35 . 36 . 37 . 38 . 39 . 40 . 41 . 42 . 43 . 44 . 45 . 46 . 47 . 48 . 49 .  
 . 50 . 51 文殊師利門菩薩署經 . 52 . 53 . 54 . 55 . 56 . 57 . 58 . 59 .  
 . 60 . 61 . 62 . 63 . 64 . 65 . 66 . 67 觀藥王 上二菩薩經 . 68 . 69 .  
 . 70 . 71 . 72 . 73 . 74 . 75 . 76 . 77 虛空藏菩薩所問 幾福經 . 78 .  
 . 79 . 80 . 81 . 82 . 83 . 84 . 85 .

この七寺本も、高麗版・金版と同内容である。中尊寺本と比べ、誤脱・誤写がやや多いかと思われる。

広島大学蔵石山寺本安元(一一七五)頃写本および西方寺本(鎌倉中期写本)巻第五本文の経名は、以下の通りである。

③石山寺本

1 . 2 . 3 . 4 . 5 . 6 . 7 . 8 . 9 . 10 . 11 . 12 . 13 . 14 . 15 .  
 . 16 . 17 文殊 利佛土嚴淨經 . 18 . 19 . 20 . 21 . 22 . 23 孔雀 神  
 呪經 . 24 . 25 . 26 . 27 . 28 . 29 . 30 . 31 . 32 . 33 . 34 . 35 . 36 .  
 37 . 38 . 39 . 40 摩訶摩邪經 . 41 . 42 . 43 . 44 . 45 (欠) . 46 . 47 .  
 出生菩提 經 . 48 . 49 . 50 . 51 文殊師利問菩薩署 . 52 . 53 . 54 .  
 . 55 . 56 . 57 . 58 . 59 . 60 . 61 . 62 . 63 . 64 . 65 . 66 . 67 . 68 .  
 69 . 70 . 71 . 72 . 73 (欠) . 74 . 75 . 76 . 77 . 78 . 79 . 80 菩薩 國  
 經 . 81 . 82 . 83 . 84 . 85 後出阿弥 偈 .  
 ④「西方寺本」(巻首欠)  
 1 3 (欠) . 4 (經名欠) . 5 . 6 . 7 . 8 . 9 . 10 . 11 . 12 .  
 13 . 14 . 15 . 16 . 17 . 18 . 19 . 20 . 21 . 22 . 23 孔雀 神呪經 . 24 .  
 25 . 26 . 27 . 28 . 29 . 30 . 31 . 32 . 33 . 34 . 35 . 36 . 37 . 38 .

39 . 40 摩訶摩邪經 . 41 . 42 . 43 . 44 . 45 (欠) . 46 . 47 . 48 . 49 .  
 . 50 . 51 . 52 . 53 . 54 . 55 . 56 . 57 . 58 . 59 . 60 . 61 . 62 . 63 .  
 64 . 65 . 66 . 67 . 68 . 69 . 70 . 71 . 72 . 73 (欠) . 74 . 75 . 76 .  
 77 . 78 . 79 . 80 菩薩 國經 . 80 . 81 . 82 . 83 . 84 . 85 .  
 石山寺本と西方寺本とは、共に45月明菩薩經と73除恐災横經の  
 本文を持たず、80を菩薩國經としていて、両者近い関係である。  
 以上、二經の有無と経名の小異はあるものの、その他の異同は、  
 異体字・省略あるいは誤脱・誤写の範囲内である、と見られる。  
 よって、中尊寺本・七寺本は高麗版・金版と同じ、石山寺本・  
 西方寺本も高麗版・金版と同系といえる。この点、山田孝雄が大  
 治本の巻頭目録を根拠に、日本古写本大治本と高麗版とが近い、  
 としたとおりである。

2. 宋版『玄應一切経音義』巻第五における本文の経名

A. 東禅寺版・開元寺版・思溪版『玄應一切経音義』巻第五  
 における本文の経名

右の高麗版および日本古写本に対して、宋版東禅寺版・開元寺  
 版・思溪版の音義本文経名はつぎの如くである。

「東禅寺版」開元寺版「思溪版」

1 . 2 . 3 . 4 . 5 . 6 . 7 . 8 . 9 . 10 . 11 31 欠 . 32 (經名  
 欠) . 33 . 34 . 35 . 36 . 37 . 38 . 39 . 40 . 41 . 42 . 43 . 44 . 45 .  
 46 . 47 . 48 . 49 . 50 . 51 . 52 . 53 . 54 . 55 . 56 . 57 . 58 . 59 . 60 .  
 . 61 . 62 . 63 . 64 . 65 . 66 . 67 . 68 . 69 . 70 . 71 . 72 . 73 . 74 .  
 75 . 76 . 77 . 78 . 79 . 80 . 81 . 82 . 83 . 84 . 85 .  
 この三本の音義本文経名は、全同である。山田が指摘した開元

寺版ばかりでなく、東禪寺版・思溪版にも、大幅な本文の欠落が存する。

この本文欠落は、当該本の何紙かが落丁・散逸したものでない。東禪寺版・開元寺版・思溪版とも、一紙版面の途中から10等目菩薩所問經に続いて32密迹金剛力士經の被注字・注文が記され、33東方最勝燈王如來經以下が刻されている。版心刻紙数も連続している。

その欠落部分前後の東禪寺版・開元寺版本文は、次のようである。この箇所は、改行位置（／）を含め、両版同一本文である。

10等目菩薩所問經上卷

曷徹 〈古文曷芮二形今作炳同碧皿反／廣雅明也通也三蒼云

著明也〉

陶現 〈徒高反詩云上／帝其陶陶變也〉

32錯教 〈蒲没反教然忽然／也亦亂也逆也〉

訓訖 〈上呼運反教導也／下虚殷反訖樂也〉

33東方最勝燈王如來經

慳泥 伎羅 〈巨支上支二反〉

（以下略）

宋版思溪版は以下のとおり、10等目菩薩所問經上卷の続きを記載し、同下卷音義本文も掲載する。

10等目菩薩所問經上卷

曷徹 〈古文曷芮二形今作炳同碧皿反廣／雅曷明也徹通也三

蒼云著明也〉

陶現 〈徒高反詩云上／帝其陶陶變也〉

去藏 〈才浪反積蓄也如庫藏／也經文作𪛗非體也〉

督住 〈又作督異体督異体同都木反尔雅／督正也方言督察也

理也〉 愴然 〈鳥外／反〉

轉霍 〈呼郭反案霍儻忽急疾也霍然忽然也經文／從火作燿胡

沃反說文燿灼也燿非此用也〉

而𪛗 〈此字習謬已久人莫辯正／今詳其義理宜作共相二字〉

輕佻 〈聽遼反字書佻輕也廣雅佻佚也尔雅／佻偷也苟且也經

文從手作挑非體也〉

10下卷 晴陰 〈又作暉殊二形同自盈／反聲類雨止曰晴也〉

焜煌 〈胡本反下胡光反方言／焜煌盛兒也光暉也〉

青紅 〈且經反東方色也光生火從生丹丹青之信必然也經文作

／菁華之菁非也菁音紫盈反三蒼謂韭之英曰菁也〉

32錯教 〈蒲没反教然猶忽／然也亦亂也逆也〉

訓訖 〈上呼運反教導也教也誠也／下又作欣同虚殷反訖樂也〉

33東方最勝燈王如來經 慳泥

伎羅 〈巨支上支二反〉 𪛗𪛗 〈火利／反〉

（以下略）

しかし、それに続けて32密迹金剛力士經下卷の「錯教」「訓訖」が引かれることは、東禪寺版・開元寺版と等しい。

B. 宋版『玄應一切經音義』巻第五における本文欠落の理由  
右の検討によつて、資料を加えても、『玄應一切經音義』巻第五本文の経名は、山田孝雄の説いた如く、高麗版・日本古写本系と宋版系とに分かれることが確認された。

では、宋版における右の本文欠落は、なぜ生じたのであろうか。

東禅寺版・開元寺版の本文は、10「等目菩薩所問經」上巻途中から11〜31の諸經への注文を欠き、32「密迹金剛力士經」であることを掲げずにその注文を「等目菩薩所問經」上巻途中に継ぎ、それに33「東方最勝燈王如來經」を続けている。

このような欠落は、大きな落丁がありながらそのまま紙を継いだ底本をもとに版を刻したために生じたとしか考えられない。

東禅寺版は、高麗蔵とは異なり、開寶蔵熙寧（一〇六九—一〇七七）刻本を基に刊刻されたと考えられている。開元寺版・思溪版は、その東禅寺版を基に刻された。

その北宋開寶蔵熙寧刻本・開寶蔵初刻本とも『玄應一切經音義』が現存しないため、開寶蔵初刻本の模刻本である高麗初雕版を見る。すると、高麗初雕版は、「等目菩薩所問經上巻」の「陶現」の注で第十二紙（丈・張）が終わる。そして、東禅寺版でこれに続く「錯教」「訓訃」は、高麗初雕版では第二十七紙三行目からはじまる「密迹金剛力士經下巻」の被注語である（高麗再雕版・金版も同一）。すなわち、東禅寺版・開元寺版は、高麗版・金版で約十四紙分の本文を欠落させている。

開寶蔵熙寧本では、「密迹金剛力士經下巻」の被注語「錯教」から第二十七紙が始まっていたのではなからうか。そうであったならば、東禅寺版は、開寶蔵熙寧本第十三紙から第二十六紙の十四紙分を飛ばして継いだ本文を基に、本文を刻したことになる。

開元寺版も、まったくそのまま印刷している。

思溪版では修正を加えたものの、東禅寺版・開元寺版と大差は無い。思溪版の本文点検者も、大幅な本文欠落には気付いていない。

『玄應一切經音義』は、すべての經に注を付しているわけではない。欠落があつてもなお、巻第五は前後の巻と同等の分量があつたため（東禅寺版で、巻第五は全十二紙、巻第四は全十八紙・巻第六は全十一紙である）、東禅寺版・開元寺版・思溪版の刊刻者は不自然に思わなかつたのであろう。

三、『玄應一切經音義』巻第五における經名目録の經名

次に、『玄應一切經音義』各本の巻第五における經名目録の經名を確認する。

1. 高麗版・金版および日本古写本における經名目録の經名

A. 高麗版・金版『玄應一切經音義』巻第五における經名目録の經名

録の經名

高麗再雕版の巻第五巻頭目録は、左のとおりである。

〔高麗再雕版〕

- |              |              |
|--------------|--------------|
| 1 海龍王經       | 44 梵女首意經     |
| 2 央掘魔羅經      | 45 月明菩薩經     |
| 3 觀察諸法行經     |              |
| 46 滅十方冥經     | 4 七佛神呪經      |
| 47 出生菩提心經    | 5 菩薩本行經      |
| 48 普門經       | 6 稱揚諸佛功德經    |
| 49 心明經       | 7 力莊嚴三昧經     |
| 50 不思議光菩薩所說經 |              |
| 8 須真天子經      | 51 文殊師利問菩薩署經 |
| 9 般舟三昧經      | 52 德光太子經     |



- 10 等目菩薩所問經 53 施燈功德經  
 11 超日明三昧經 54 菩薩訶色欲經  
 12 月上女經 55 人本欲生經  
 13 中陰經 56 不必定入印經  
 14 須彌藏經 57 魔逆經  
 15 佛華嚴入如來 境界經  
 58 濟諸方等學經 16 諸佛要集經  
 59 菩薩行五十緣身經  
 17 文殊師利佛土嚴淨經  
 60 彌勒菩薩所問本願經  
 18 濡首菩薩 分衛經  
 61 堅固女經 19 大乘同性經  
 62 演道俗經 20 阿閼佛國經  
 63 寶網經 21 蓮華面經  
 64 百佛名經 22 迦葉經  
 65 觀無量壽經 23 孔雀王 經  
 66 不空絹索經 24 發覺淨心經  
 67 觀藥王藥上二菩薩經  
 25 无上依經 68 請觀音經  
 26 移識經 69 十一面觀世音經  
 27 未曾有經 70 觀世音菩薩授記經  
 28 不思議功德經 71 鹿母經  
 29 大吉義呪經 72 鹿子經  
 30 菩薩夢經 31 文殊問經  
 74 温室洗浴衆僧經 32 密迹金剛力士經

- 75 四不可得經 33 東方最勝燈王 經  
 76 諸德福田經 34 成具光明定意經  
 77 虛空藏菩薩所問持幾福經  
 35 太子須達 拏經  
 78 菩薩投身餓虎起塔因緣經  
 36 太子墓魄經  
 79 頻婆 娑羅詣佛供養經  
 37 須賴經 80 薩羅國經  
 38 金色王經 81 天王太子辟羅經  
 39 獨證自在 三昧經  
 82 阿弥陀鼓音 陀羅尼經  
 40 摩訶摩耶經 83 八陽神呪經  
 41 如來方便善巧呪經  
 84 幻土仁賢經 42 勝鬘經  
 85 後出阿弥陀 經 43 須摩提經  
 高麗初雕版と同じく、開寶藏初刻本を底本としたと考えられている金版の巻頭目録も、經名順・改行位置を含め、右の高麗再雕版巻頭目録と全同である。<sup>13)</sup>  
 右の高麗版『玄應一切經音義』巻第五目録の經名順は、一見して知られるとおり、本文のそれと大きく異なる。本文經名順を付した数は、横に進むことを原則としている。この經名順と「横書き」については、日本古写經のものと併せて、後述する。  
 また、73 除恐災横經を音義本文に持つにも拘わらず、巻頭目録には記していない。  
 すなわち、高麗版の巻頭目録は、本文の經名を抜き出す方法で

作成されていない。別系統の目録を巻頭に付したものである。

B. 日本古写本『玄應一切経音義』巻第五における経名目録の経名

中尊寺一切経『玄應一切経音義』巻第五巻頭目録は、次のとおり、上下二段で一貫して書写されている。73除恐災横経も記すため、高麗版より一経名多い。

①「中尊寺本巻頭目録」

- 17 16 15 佛華嚴入如來 || 境界経
- 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
- 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44

菩薩行五十縁 || 経

18 滿首菩薩 || 分衛経

23 孔雀王 || 経

29 大吉義神呪経

33 東方最勝燈王 || 経

35 太子須達拏経

79 頻婆娑羅詣佛供養経

82 阿弥陀鼓音 || 陀羅尼経

85 後出阿弥陀経

- 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19
- 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61

上段・下段それぞれ、本文の経名順は横に進んでいる。(この点は、後述する。)

中尊寺本巻頭目録では、経名35・79・85に、高麗版本文経名との相違が見られる。中尊寺本の本文経名は、この35・79・85も高麗版と同名であった。したがって、巻頭目録の経名と本文の経名とが異なる。

②「石山寺本巻頭目録」

石山寺本『玄應一切経音義』巻第五巻頭目録も、中尊寺本と同じく、すべて二段で書かれている。

15	佛華嚴入如來		境界經
14			57
13			56
12			55
11			54
10			53
9			52
8			51
7			50
6			49
5			48
4			47
3			46
2			45
1			44

48 普門品 ||

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
	獨證自在三昧經			太子須達拏經	東方最勝燈王經											孔雀王經					濡首菩薩分衛經			
83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59
	阿弥陀鼓音陀羅尼經			頻婆娑羅詣佛供養經											請龍觀音經									菩薩行五十緣經





35 太子須達拏經

78

36 頻婆娑羅詣佛供養經

79

37 80

38 81

39 82

40 83

41 84

42 85 後出阿弥陀經

43

この七寺本巻頭目録の本文経名順は、横に整然と並んでいない。

45月明菩薩經と73除恐災横經が存しないため、46と74とで上下段の経名並びが入れ替わっている。この目録は、石山寺本や西方寺本のように、45月明菩薩經・73除恐災横經を欠く本文に対応した目録である。

しかし、七寺本の音義本文には、先に見たとおり、45月明菩薩經・73除恐災横經ともに存した。

したがって、この七寺本巻頭目録も、本文の経名と一致していない<sup>14</sup>。

そして、やはり35・39・79・85の四経名が高麗版本本文経名と異なり、高麗版・石山寺本・大治本の目録経名と一致する。

C. 高麗版・金版および日本古写本における経名目録と本文の経名

以上、高麗版・金版・日本古写本『玄應一切経音義』巻第五の目録経名は、いずれも、本文経名と異なりが見られた。

経名目録および本文ともに残り、両者比較可能な本の中では、高麗版・金版の巻頭目録には73除恐災横經が無く、七寺本巻頭目録には45月明菩薩經と73除恐災横經とが無い。しかし、高麗版・金版・七寺本の本文には、45・73とも存していた。

反対に、石山寺本巻頭目録は、本文には無い45・73の経名を掲出している。巻頭目録が欠損している西方寺本も、45・73を持たない音義本文であった。石山寺本・西方寺本本文で共通して、45・73の経名が欠けていることから、不注意による書き落としとは考えられない。この45・73両経名と注文を欠く本文の系統が存したものであろう。

したがって、七寺本巻頭目録で45・73を欠き、高麗版・金版の巻頭目録に73が無いのも、単なる誤脱とは考えられない。45・73の本文を持たない石山寺本・西方寺本系本文の目録が、七寺本巻頭に置かれたものであろう。高麗版・金版の巻頭目録を見れば、45月明菩薩經のみ欠けた本文も存したことが推測される。

中尊寺本は、巻頭目録と本文の経名数が一致する。しかし、35・79・85の経名が、本文と目録とで異なっていた。

巻頭目録と本文との経名異同は、高麗版・金版・石山寺本・七寺本の35・39・79・85にも見られた。

そして、高麗版・金版・石山寺本・七寺本（・大治本）の35・39・79・85および中尊寺本の35・79・85の目録経名は、一致していた。これら諸本の目録は、同一の本文から経名を抽出して作成した目録を淵源とするものであろう。

このように、現存本の本文と目録との関係は交錯している。

2. 宋版『玄應一切経音義』巻第五における経名目録の経名

A. 東禪寺版・開元寺版『玄應一切経音義』巻第五における

経名目録の経名

大幅な本文欠落がある東禪寺版『玄應一切経音義』巻第五の巻頭目録は、つぎのとおりである。

60	59	57	55	53	51	49	47	45	43	41	39	37	35	33	9	7	5	3	1
彌勒				文殊	問菩薩署				如來方便善巧				東方最勝燈王						
所問本願																			
經																			
61		58	56	54	52	50	48	46	44	42	40	38	36	34	10	8	6	4	2
						不思議光菩薩							太子慕魄						
						經							經						

62

64

66

68

70 觀 音菩薩授記經

72

74

76

77 虛空藏菩薩所問持 福經

78 菩薩投身餓虎起塔 緣經

79 頭 毘娑羅詣佛供養經

80

82

83

85

67 觀藥王藥上 菩薩經

69

71

73

75

81

84

本文に見られる経名を順に掲げていけば、右の目録になる。11  
 32が無く、本文に存する45月明菩薩經・73徐恐災横經は掲出さ  
 れている。目録は、本文経名の一覧なのであるから当然である。  
 (しかし、高麗版・大治本等の目録は、本文の経名と一致してい  
 なかった。)

ただし、この東禪寺版の目録作成者は、本文に32密迹金剛力士  
 經の被注字・注文が存することに気付いていない。  
 開元寺版の第五巻頭目録も、この東禪寺版と全同である。

B. 思溪版『玄應一切経音義』巻第五における経名目録の経名

思溪版卷第五の巻頭目録は、左のごとくである。

68	66	64	62	60	58	56	54	52	50	48	46	44	42	40	38	36	34	32	9	7	5	3	1
				彌勒					不思議光菩薩							太子慕魄							
				所問本願					經							經							
69	67	65	63	61	59	57	55	53	51	49	47	45	43	41	39	37	35	33	10	8	6	4	2
	觀藥王藥上								文殊					如來方便善巧				東方最勝燈王					
	菩薩								經					經				經					

70 觀音菩薩授記經

71

72

73

74

75

76

77 虛空藏菩薩所問持福經

78 菩薩投身餓虎起塔緣經

79

80

81

82

83

84

85

右思溪版の目録は、本文に經名が欠けている32密迹金剛力士經を補っている。また、東禪寺版・開元寺版の79頭毘娑羅詣佛供養經を、本文の經名に合わせ、頗毘娑羅詣佛供養經に訂正している。

C. 東禪寺版・開元寺版および思溪版における經名目録と本文の經名

東禪寺版・開元寺版の巻頭經名目録は、本文の經名と一致していた。ただし、この両版目録は、本文に被注字・注文が存する32密迹金剛力士經を掲げていない。

それを補ったものが思溪版目録である。思溪版は、本文の經名に合わせた經名訂正をも行なっていた。

これら宋版の經名目録は、36・79の經名以外は、大きな欠落も含め、本文の經名に合致している。



四、高麗版・金版および日本古写本において本文と目録との経名不一致が生じた理由

1. 経名目録の掲出順について

本文と目録とで経名順が大きく異なることについて、箕浦（二〇〇六）は、石山寺本の巻頭目録を原形と考え、「石山寺本を上下下の順と考えて上下下の順に書き写し、経典名が長い場合は一行書きとする。」途中で「73を書き落とすと」高麗版巻頭目録になる、と指摘した。七寺本については、「途中で45、73を書き落とすとこのようになる」とする。箕浦は、巻第五を含め、巻第七・八・十三・十六についても、同様の指摘を行なっている。巻第五の45および73は、複数の本の目録あるいは本文において欠けており、不注意で「書き落とす」されたものでないことは、すでに述べた通りである。

しかし、経名順に規則性が無いように見られる高麗本等の目録作成過程は、箕浦が考えた通りである。

2. 経名目録の「横書き」について

A. 現存本「横書き」目録は横に書かれたものか

箕浦（二〇〇六）は、『玄應一切経音義』の「巻第五、七、八、十三、十六の目録は、元来、上段を横に読んだ後、下段を横に読むという形式で記されていたものの順序が入れ替わって現存本の状態になったと考えられる。」とも指摘した。

しかし、大治本目録は、最初の経名を「巻第五」の下から始めている。これは、二段の経名を上下下と縦に読んだためである。大治本目録は、石山寺本のように書写された目録を、上下下と

左に進む縦書きと見て、「巻第五」の下から続けたものと考えられる。

「石山寺本」										「大治本一切経音義目録」									
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	44	44	45	46	47	48	49	50	51	52
					↓														

この大治本目録が「横書き」であるとする、経名数の半数を数えておいて、第一経名に続けて第二経名以降を下段に横に書き、空白にしておいた上段の最初に戻って、また横に書きするという、極めて不自然な書写が行なわれたことになる。

また、この大治本目録は、丁をまたがって二段で書写されている。本文の経名順に経名が横に並ぶ中尊寺本・石山寺本の目録も、紙継を越えて、上段・下段で書かれている。「横書き」であったとすると、それは紙をまたがってなされたことになる。そのような書写は、通常ではなからう。

事実、中尊寺本も、巻第一・三・四・十・十二・十五・十七・十八・十九・二十・二十一・二十三は、上下下と左に進む縦書

きである。石山寺本の現存本卷第三・四・十・十二の巻頭目録も同様である。<sup>15)</sup>

それだからこそ、各段横に並んでいる目録経名を、上下上下と進行するもの書き直した高麗版・七寺本のような経名目録が生じた。臨時の上下二段組み書写法は、他巻の書写法と異なることもあつて定着せず、後の書写者に経名順が理解されなくなった。<sup>16)</sup>

#### B. 「横書き」目録の発生と巻頭目録

では、石山寺本のような上下二段の「横書き」に見える目録は、どのように生まれたのであろうか。

右の検討で、古い形式を留めることが知られた大治本は、第一帖のはじめにやや小さな字で一括して書かれた「一切経音義目録」以外に、各巻巻頭にも目録を持つ。その第一巻巻頭目録は、左の通り、一行一経名で書かれる。

一切経音義 沙門玄應撰

大方廣佛華嚴經（舊五十／八卷）

大方等大集經（廿卷）

大集日藏分經（十卷）

大集月藏分經（十卷）

大威徳陀羅尼經（十九卷）

法炬陀羅尼經（二十卷）

天文字等文者／並集後紙

新華嚴經（八十卷） 序字及天

高麗版等では巻第一最後の経名である「法炬陀羅尼經」の下に、

大治本では「新華嚴經」が書かれている。（この巻頭目録における書記法からも、「新華嚴經」が追加されたものであることが知

られる。）

金剛寺蔵『玄應一切経音義』巻第一巻頭目録も、一行一経名で書かれる。この鎌倉中期写本では、左のとおり、新華嚴經も単独行となっている。

一切経音義 沙門玄應撰

大方廣佛華嚴經（舊五十八卷）

大方等大集經（廿卷）

大集日藏分經（十卷）

大集月藏「欠損」

大威徳「欠損」

法炬陀羅「欠損」

新華嚴經（八十卷） 序字及天<sup>17)</sup>等文者並集後紙

七寺本『玄應一切経音義』も、巻第三と第十の巻頭目録を一行一経名として<sup>17)</sup>いる。

このように、『玄應一切経音義』巻頭目録の古い形式は一行名一行書きであった、と思われる。<sup>18)</sup>

この一経名一行書き目録が、二段に書かれるようになったと考えるのが、もつとも自然であろう。<sup>19)</sup>

全二十五巻の一切経音義には、注の対象となった全経名を一覧できる大治本第一帖巻頭「一切経音義目録」のような別目録が付されていれば便利である。『玄應一切経音義』は、すべての経を注の対象とはしていないのであるから、当該経が存在するであろうその巻に、求める経への音義が存するか否かを調べるには、各巻に配された経名の全体を見渡せるのが良い。巻第五のように経名の多い巻では、一覽性を優先し、全体を縮小して上下二段とす

る書写が起きたのであろう。

下の大英図書館蔵敦煌本 S3538『玄應一切経音義』巻第七（八世紀前半写）の紙背は、『玄應一切経音義』第一帙の収載巻一覽に追加した、全巻確認メモのように見られる。（画像は、国際敦煌プロジェクト <http://idp.ate.ryukoku.ac.jp/idp.a4d> に依る。）全体を一覧するために、「横書き」となったのであろう。

「一切経音義目録」も、おそらくこのようなものであり、別巻として独立して伝えられた。大治本の「一切経音義目録」は、以下の理由から、その一つであると考えられる。

1. 第一巻「新華嚴經」は、「一切経音義目録」では「法炬陀羅尼經」下の余白（三段目）に他より小さな字で補入されている。完成した目録に、後から追加したことが明白である。
2. 「一切経音義目録」と各巻巻頭目録とが異なる場合が存する。

- ① 巻第十三「摩登伽經」「梵摩喩經」「自愛經」を、「一切経音義目録」は有し、巻頭目録は記載しない（本文経名には、「摩登伽經」「梵摩喩經」は存し、「自愛經」は欠けている）。
- ② 「一切経音義目録」巻第十六「大比丘三千威儀經」を、巻頭目録は「大比丘三千威儀」とし、「經」を落としている。
- ③ 「一切経音義目録」は、「第廿一卷」の下に「大乘經翻」と記す。これは、巻頭目録に「一切経音義卷第二十一大乘經翻經沙門玄應撰」とある「翻經沙門」の「翻」を書いたものである。



「一切経音義目録」の「第廿四卷（小／乗） 翻」「廿五卷（小／乗） 翻」は、この類例である。巻頭目録では、

卷第二十四・二十五とも「小乗論 翻經沙門玄應撰」とある。

これらの点から、大治本の「一切経音義目録」が、現在の大本巻頭目録から抽出作成されたものとは考えられない。

このように、「一切経音義目録」が各巻巻頭目録・音義本文と独立して書写されたことが、先に見た、本文の経名と目録経名との不一致が生じた原因でもあろう。

## 五、結論

『玄應一切経音義』巻第五は、注の対象とした経名の有無と異同とによって、次のように分類できる。

より複雑な巻頭目録を先に、高麗版本本文の経名に近いものから掲げる。

### 【巻頭目録の経名】

A. 高麗版本本文の経名と全同のもの。

(ナシ)

B. 35・79・85の経名が高麗版本本文の経名と異なるもの。

中尊寺本。

C. 35・39・79・85の経名が高麗版本本文の経名と異なるもの。

石山寺本・大治本。

D. 73を欠き、35・39・79・85の経名が高麗版本本文の経名と異なるもの。

高麗版・金版。

E. 45・73を欠き、35・39・79・85の経名が高麗版本本文の経名

と異なるもの。

七寺本。

F. 11・31を欠き、36の経名が高麗版本本文の経名と異なるもの。

宋版思溪版。

G. 11・32を欠き、36・79の経名が高麗版本本文の経名と異なるもの。

宋版東禅寺版・開元寺版。

### 【音義本文の経名】

A. 高麗版本本文の経名と全同のもの。

金版・中尊寺本・七寺本。

E. 45・73を欠き、80を菩薩國經とするもの。

石山寺本・西方寺本。

G. 11・32を欠くもの。

宋版東禅寺版・開元寺版・思溪版。

右のように、現存本『玄應一切経音義』巻第五に、巻頭目録と本文の経名とが一致するものは無い。

山田が説いた如く、経名から見た場合、日本古写本は高麗版に近く(ABCDE, E)、宋版はそれと遠い(FG, G)。

日本古写本の本文が原本『玄應一切経音義』の本文に近いであろうことは、山田孝雄以来、多くの先行研究が述べたとおりである。その原本『玄應一切経音義』は、唐代七世紀中葉の言語を反映したものであり、日本の古文獻が引用し続けた本文である。

諸本本文の比較対照による原本『玄應一切経音義』本文の再建作業は、いまだ多く今後の課題である。

注

(1) 小林芳規「一切經音義 解題」(『古辞書音義集成』(一九八一年、汲古書院)所収)、参照。

(2) 石塚晴通・池田証寿「レニングラード本一切經音義」Φ二三〇を中心として(「訓点語と訓点資料」八六輯、一九九一年三月)、石塚晴通「ペテルブルグ本一切經音義」Φ二三〇以外の諸本(「訓点語と訓点資料」九六輯、一九九五年九月)、西脇常記「ドイツ将来のトルファン漢語文書」(二〇〇二年、京都大学学術出版会)、國家圖書館善本特藏部敦煌吐魯番學資料研究中心「敦煌學國際研討會論文集」(二〇〇五年、北京圖書館出版社)、張娜麗「西域出土文書の基礎的研究」(二〇〇六年、汲古書院)、徐時儀校注「一切經音義三種校本合刊」(二〇〇八年、上海古籍出版社)、耿銘「玄應《众经音义》异文研究」(二〇〇八年、上海师范大学博士論文)、范舒「吐鲁番本玄应《一切经音义》研究」(二〇一二年、浙江大学硕士論文)等、参照。

(3) 『一切經音義 二十五卷』(一九三二年、西東書房)、『古辞書音義集成』(一九八一年、汲古書院)、日本古写經善本叢刊 第一輯「玄應撰 一切經音義二十五卷」(二〇〇六年、國際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会)に、聖語藏本・大治本・石山寺本・七寺藏本・金剛寺藏本・西方寺藏本の影印が収められている。

(4) 契丹版に入ったかどうかは、現存本が見つかっておらず、不明である。房山石經の『玄心一切經音義』も残存しない。  
依拠テキストは、次のとおりである。

(5) 大治本―『古辞書音義集成』所収本、中尊寺本―京都国立博物館蔵マイクロフィルム、石山寺本―原本および『古辞書音義集成』所収本、七寺藏本・金剛寺藏本・西方寺藏本―『玄應撰一切經音義二十五卷』(二〇〇六年、國際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会)所収本、東禅寺版―醍醐寺藏本、開元寺版―書陵部藏本、思溪版―長瀧寺藏本、高麗本―

<http://ks.sutara.kr/rik/index.do> および『高麗大藏經初刻本輯刊』(二〇一二年、西南師範大学出版社)、金版―『中華大藏經』。

(6) この高麗再雕版は、全巻揃っていることと、『高麗国新雕大藏校正別録』が存在することから本文への信頼が高い。そのため、『大正新修大藏經』に『玄應一切經音義』が所収されていないこともあって、現在もなお『玄應一切經音義』研究の依拠本文とされることが多い。

(7) 石山寺本文に45・73の經名が欠けることは、小林「一切經音義解題」四七六頁に指摘されている。また、箕浦尚美「金剛寺・七寺・東京大学史料編纂所・西方寺藏玄應撰『一切經音義』について」(『日本古写經善本叢刊 第一輯 玄應撰 一切經音義二十五卷』(二〇〇六年三月)所収)には、西方寺本についても指摘されている。

(8) この宋版における本文の欠落は、洪武南藏本・明版(永樂南藏本・永樂北藏本)まで引き継がれる。ただし、洪武南藏本・明版(永樂南藏本・永樂北藏本)には、「密迹金剛力士經」が經名として立てられている。

(9) 山田は、「巻第五の目録にある超日月三昧經以下温室洗浴衆僧經に至るまで四十一經の目は宋元明の諸本になくして本文亦これなし」と述べた。しかし、宋版巻第五目録の落ちは、11と32までの二十二經である。本文での落ちも、11と31までの二十一經でしかない。この点は、周祖謨「校讀玄應(一切經音義)後記」(一九六六年、中華書局)、上田正「玄心音義諸本論考」(『東洋学報 第六十三卷第一・二号、一九八一年十二月)、徐時儀「玄應《衆經音義》研究」(二〇〇五年、中華書局)にも指摘がある。山田が数えたのは、高麗版巻第五巻頭目録である。右掲高麗版巻第五巻頭目録の11超日月三昧經と74温室洗浴衆僧經までを、上下上下の縦書きとして数えたと、四十一經名になる。

(10) 徐時儀「玄應《一切經音義》的流傳與版本考証」(『古写經研究の最前線―シンポジウム講演資料集成―』(二〇一〇年、國際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会)所収)。

(11) 東禅寺版『玄應一切經音義』巻第五の帖末にも、「詳對經弟子黃端」や「詳勘經沙門正衡」の巻末刊記は存する。

- (12) こゝでも、高麗版本文の経名を基準とし、同じ経名番号を用いる。字句の異同がある場合は、字句の増減がある場合は、傍線を引く。なお、「華・花」「最・取」「拏・拏」など異体関係と判断されるものは注をせず、統一して表記する。また、ミセケチ・補入・転倒等、原本の訂正は、訂正後の形を掲げる。以下同じ。
- (13) 高麗初雕版の目録は、「高麗大藏経」<http://kb.sutra.re.kr/riki/index.do> および『高麗大藏経初刻本輯刊』で公開されている南禅寺藏本の、第一紙巻頭目録から第八紙途中までが補写されているため、不明である。その補写底本は、後述の宋版思溪版である。
- (14) なお、単独の長題経名15佛華嚴入如來不思議境界經・67觀藥王藥上二菩薩經は一行で改行し、長題経名が連続する場合(50不思議光菩薩所説經・51文殊師利問菩薩署經、77虚空藏菩薩所問持幾福經・78菩薩投身餓虎起塔因縁經)は先に出る50不思議光菩薩所説經・77虚空藏菩薩所問持幾福經で改行している。
- (15) 中尊寺本巻第七・八・十三・十六、石山寺本巻第七は、上段・下段それぞれに横に進む、巻第五と同じ書式である。また、中尊寺本の巻第二・六・九・十四・二十二・二十四・二十五、石山寺本巻第二・六・二十五は、単独經の音義であるため巻頭目録が無い。
- (16) 中尊寺本・石山寺本・大治本の目録書写者も、「横書き」とは思っていないかったであろう。
- (17) 七寺本・西方寺本は、残念なことに、巻第一巻頭が欠損している。
- (18) 高麗再雕版『玄應一切經音義』も、巻第十・十一・十二・十七・十八・十九・二十・二十一・二十三の九巻は、一経名一行で彫られている。複数經律論の音義であるため巻頭目録が存する『玄應一切經音義』全十五巻中、高麗再雕版は一経名一行書きの巻の方が多い。この九巻の巻頭目録を一行一経名とすることは、現存する高麗初雕版(巻第十・十一・十九・二十・二十一・二十三)および金版(巻第十・十七・十八・二十三)でも同様である。

なお、石山寺藏・興聖寺藏・金剛寺藏『出三藏記集』もまた、

- (19) 一経名一行書きを基本とする。短い経名が続ぎ、一行に二経名を記せる場合でも、一経名で改行している。
- (20) 比較的新しい徐時儀校注『一切經音義三種校本合刊』(二〇〇八年、上海古籍出版社)でも、日本古写本が紹介され、校本とされているものの、校勘記にはほとんど挙がっていない。なお、この度、石山寺本巻第十が広島大学の蔵本となった。また、石山寺本は、巻第十二が名古屋博物館蔵、巻第一・巻第二十が某氏蔵であり、原本調査済みである。さらに、『弘文莊待賣古書目』31号(一九五八年)・同37号(一九七〇年)には、現在所在不明の石山寺本巻第十三・二十四が掲載されている。

〔付記〕 原本あるいは写真版を閲覧させていただいた御所蔵者各位に、心から感謝申し上げます。なお、本稿は、二〇一三年十二月二十二日に原卓司氏・青木毅氏の前で発表し、問題を明確にすることができたものである。また、投稿後、査読委員の御指摘により、誤りや不明な点を訂し、参考文献を加えることができた。皆様に、御礼申し上げます。

〔やさき いさむ、広島大学大学院教授〕

(平成二十六年二月十日受理)